
愛逢月

Ewan

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛逢月

【Nコード】

N7740J

【作者名】

E w a n

【あらすじ】

自由気ままな短編集。

愛

「あんたさ、あたしのこと好きでしょ」

唐突な台詞だった。

隣の席になって2時間ちよつと。

そんなことを言ってきた彼女は、名前すらわからない。

「え」

とりあえず手に持っていたシャーペンを落下させ、わからないと言った表情で俺は苦笑いを試してみた。

「ね、あたしわかるんだから」

彼女は短く揃えて切った前髪を横に揺らしながら、無邪気に笑ってそう言った。

「……」

俺はと言うと、笑ったときに右頬にだけできるえくぼになぜか見られて、押し黙っていた。

「ねえ」

いま、あの時よりも大分綺麗になった隣の彼女に問う。

「俺たちが初めて話したとき、おまえ何て言っただか覚えてる？」

きょとん、とした顔で彼女は俺を見つめた。

そしてふいに、笑顔になる。

いまも変わらない。

彼女は右頬にだけえくぼができる。

「あれね」

「うん？」

「そうであればいいなって思ったの」

それでね、言っちゃった。

彼女は小さく零す。

まるで悪戯をして叱られた子どものように、少しだけ縮こまった。

「そう」

最初から、俺はすっかり彼女に踊らされていたわけかなにが嬉しいのか、俺の頬は勝手に緩む。

「ほら、早く」

そんなデレデレな表情をしていたら彼女に急かされた。そつと手を握る。

「幸せになろうね」

僕らは今日、結婚します。

ラフメイカー（前書き）

参考：BUMP OF CHICKEN、
“ラフメイカー”より。

ラフメイカー

「……………はあ」

漏れるため息。

もうあれから何日が経ったのだろうか。

家から一歩も出ていない俺には、時間の経過が分からなくなっていた。

………今が、いつかなんて特に興味の無い話なのだが。

——ピンポーン

そんなことを思っていた矢先、玄関のチャイムが高々と音を立てた。
無視。

あのおときから、家への訪問者に対応することはなくなっていた。

——ピンポーン

意地でも居留守を続ける。

今は誰とも、話したくない。

——ピンポンピンポンピンポンピンポン

「うるせっ!」

あまりのしつこさに、俺は勢い良くドアを開けた。
気は長くない。

あからさまに嫌な顔をした、俺の前には小柄な少年が一人、立っていた。

「こんにちは」

少年は深々とお辞儀をする。

あまりに整った顔立ちを見ると、それはどこか中世的で少女にも見える。

「……誰？」

知り合いに中学生くらいの少年は存在しない。

見たこともない、その少年に俺はぶっきらぼうに尋ねた。

「僕ですか？」

「ああ」

「名前は特にないですけど」

小さな手を、口元に持っていき、少年は悩んだような仕草を見せた。
俺はおかしなことを言う少年に、気づかれないように眉をひそめた。
新手のセールスかなんか知らないけど、早く帰ってくれ。
切実にそう願っているとき、少年はもう一度口を開いた。

「みんなはラフメイカーと呼びます」

につ、とくつたいたなく少年は笑った。

……ラフ、メイカー？

「……帰ってくれ」

「え？」

「帰れって言ってるんだ！」

パンツ、と今度こそ勢い良くドアを閉めた。

その扉の向こう側で、少年はさぞかし驚いたのだろう、詠嘆する声が若干ではあったが耳に入ってきた。

「あつ、あの！ 入れてください！」

お願いします！ と懇願する少年を俺は無視して自室に向かう。
冗談じゃない。

なにが、ラフメイカーだ。

「あのね、あのね」

懐かしい、彼女の声が蘇る。

ああ、俺はもう、彼女を懐かしいと言えるほど時間を過ごしてしまったのか。

そう思うと、自然と目から水が流れる。

「駿ちゃん、ラフメイカーって知ってる？」

「は？」

「ラフ、メイカー！」

彼女は肩まで綺麗に伸ばした髪を、ゆすりながら興奮気味に、俺に話しかけてきた。

「なに、それ」

「そのまんまだよ。笑わせてくれる、妖精さんだって」

「妖精？」

無邪気な彼女の思想に、俺は気づかれないよう小さく噴出した。

だが、そんな小さな仕草にも彼女は目ざとく気づき、指摘を始めた。

「ちょっと、いま馬鹿にしたでしょ」

「してねーよ」

「したよ！ 絶対した！」

「してねーってば」

本気で怒る彼女を見て、俺はまた笑った。

「怒ってるのになんで笑うの！」

そう言っただけ頬を赤くして、膨らませる姿も愛おしかった。

わかってねえな、と俺は彼女の髪をそつと撫でる。

その仕草で、彼女がおとなしくなることを知っている俺は幾分か卑怯である。

「……おばあちゃんがね」

「ん？」

「ラフメイカーに会ったんだって」

「へえ」

「ラフメイカーって、辛くて落ち込んでるときに、笑わせてくれるためにやってくるんだってさ」

そうだ、両親が忙しくていつも家に祖母とふたりだった彼女は、それはもう凄いほどおばあちゃんっ子だった。

しかし、そんな彼女の大切な人も2年前に亡くなった。

「ふーん」

「……興味ないでしょ」

「あるよ」

おまえの話なら、たとえ面白くないニュースの話だって興味シンシン。

その声に、その息遣い。

もうそれだけで結構、結構。

わかってないやつだよな。

「ま、いや」

「それで？ 笑わせてくれる妖精なんて、都合の良いやつもいたもんだな」

「悲観的い」

「っるせ」

このやろっ、と意地の悪そうな目で笑った彼女の首に腕を回し、じやれついた。

きゃはは、と声にだして笑う彼女。

笑うとぱっちり二重が、そのときだけは糸のように細くなる。

「あ、駿ちゃん」

「ん？」

「あした、家で待ってて」

「……は？ いいよ、仕事場まですぐだし、迎えに」

「駿介」

彼女は少しだけ真剣な表情をして、そして俺が強張ったのがわかったのか、すぐにいつもの笑顔を向けてくれた。

「あしたは、何の日？」

「……あ」

「バレンタインは女の子が頑張る日でしょう」

ふふ、と彼女は笑いながら俺の胸元に身体を寄せてきた。後ろからそっと抱きすくめる。

「なに、なんかサプライズでもしてくれんの」

「あーもー、ムードないなあ。そういうことは自前に聞かないのが常識でしょう」

「悪かったな、ムードのない男で」

すっばりと俺の腕の中に収まってしまふ彼女。

愛しい彼女。

当たり前前の幸せが、今日も明日も、その先も永遠に続くのだと思っていた。

次の日の夕方、俺は交通事故で彼女が亡くなったことを知らせる電話を受けて、その場に立ち尽くした。
ちようど、俺のアパートに来る途中の不慮の事故だった。

「入れてください」

さつきから、何度目の台詞になるだろう。
まだ少年はしつこく俺の部屋への入室を懇願していた。

「……」

俺はと言えば、だんまりを続けたまんまだ。

「ちょっと、なんで入れてくれないんですか！」

「……」

「寒いんですよ！ 外は！」

「……」

「こんのっ……わからずやっ！」

ついに少年の切れる様子が、部屋の中からでも受けて取れた。

「…………ごめんなさい」

そのすぐ後に、少年の申し訳なさそうに謝る声が小さく聞こえた。ふと、不思議に思っただけ俺は玄関先まで身体を運んだ。

「大声だすつもりは、なかったんです」

「……………」

「ただ、その…………僕、『いない』なんて言われたの初めてで…………どうすればいいか、わかんないんです。誰もが僕のこと、いつも必要としていてくれたから。あの、本当に……………」

ごめんなさい、と呟いたその言葉は、心なしか涙声だった。俺は慌てて、つい口を開いてしまった。

「なっ、ラフメイカーが泣いてどうすんだよ！」

「え……………」

「笑わせるやつが、泣いて…………どうするんだよ」

ドア越しに、小さく俺は呟く。

少年は、ひっく、と喉を鳴らしながら、そうですね、と笑った。雰囲気、笑ったのが分かった。

「…………なんで、僕、いないんですか」

「……………」

「僕、それが生きてる意味なのに…………、あなた笑わせないと、帰れません」

「…………だよ」

「え？」

「笑いたくなんか、ないんだよ！」

彼女のいない、俺の日常。

もう、どこにもあのぬくもりは存在しない。

この世界に、ただひとつだけの俺の宝物。

「……じゃあ何で泣いてるんですか」

「は？」

「なにが、哀しくて泣くんですか。いつか笑えるって、そう信じてるから、そのいつかのために人は泣くんじゃないですか、違うんですか」

「違う」

どうしようもない、もう二度と戻ってはこない。

そのぬくもりを懇願して泣くんのだ。

もう、どうしようもなくて……。

「僕はただ、あなたが笑ってくれれば」

それでいいのに。

あ、この台詞。

彼女が「甘い台詞——と俺を馬鹿にした、あのときに言った言葉だ。フラッシュバックのように蘇るその瞬間に、俺は少年がどんな想いでこのドアの前に座り込んでいるかがわかった。ただ、愛おしいのだ。

「……人が、好きなのか」

「いいえ」

「じゃあ、なんで人のために生きる」

「そんなの……」

考えすぎて、やめました。

少年は呟いた。

「人を笑わせる。自分のためになんてならないのに、それだけが僕の生きる意味。最初はばかばかしかった」

「……」

「でもね」

少年は続ける。

「愛おしかった」

「？」

「ありがとう、とか。幸せ、とか」

自分にくれる、他人のその言葉が何よりも愛おしかった。

少年は慈愛に満ちた声で、そう言った。

「ようは、お人よしなんだな」

「……かもしれませぬね」

いつのまにか玄関のドアに背中をつけて、座り込んでいた。

こんなに多くの会話を他人と交わしたのは、久しぶりだった。

少し、疲れたな。

気がつくと、俺の目の前は闇へと包まれていた。

「なあ」

「はい？」

ドア越しの会話。

少年が尋ねてきてから、何日が経ったのだろう。

いつのまにか一日中少年とする会話に浸っている自分がいた。

彼女のコト。

ゆっくりではあるが、少年との会話でだんだん回復していく自分に気がついた。

でも、まだ笑えていない。

少年を部屋に招き入れるまでには、至っていない。

怖いんだ。

彼女を忘れることが。

「最近、面影が薄くなるんだ」

駿ちゃん、と俺を呼ぶその声も、どんなトーンで呼ばれていたか思い出すことができない。

ひとつ、忘れたくないことはあつという間に忘れていくんだよ、と少年は少し申し訳なさそうに俺に呟いた。

「なあ」

「はい？」

声をかければ、いつでも少年は「其処」にいた。

だから、安心しきっていたのだ。

「なあ」

返事がなくなった、あの日の朝も。

慣れは、怖い。

彼女が死んだ、あの日だって。

俺はずっとずっと、永遠だと思っていたんだ。

ばかみたいに。

もつとも、ひとりになる準備なんかしていなかった。

二度目の、「ひとり」。

「……っおい？」

返事はない。

信じようとしていた瞬間、コレだ。

少年はいない。

なんと呼んでも返事がない。

「おい！ ラフ、メイカー！」

そうだ。

俺はあいつの名を聞いていない。

ひとが勝手に呼ぶ、そんな愛称しか知らない。

もう、一人にしないで。

お願いだから、俺からなにも離れていかないで。

わがままだと思った。

だけど、それでもいいとも思った。

「おい！」

勢い良く、ドアを開けた。

もう何日も開けていなかった、立て付けの悪いドアが嫌な音を立てて開いた。

返事のなかった少年の姿が、そこにはあった。

「……どしたんですか、そんなに焦って」

「ばっ、だって、おまえ、声しない、から」

泣きそうだった。

少年はきょとん、とした顔でそこに立っていた。

「いやね、あなたに笑ってもらおうと思って鏡を調達してきたんですよ」

「……はあ」

ほら、と言って少年は俺の前に何色とも言えない鏡を突き出した。

「ね、見てみます？」

「は」

「あんたの泣き顔、笑えるよ」

泣いていたのか。

少年に指摘されて始めて気がついた。

「……うわ」

本当に酷い、顔だった。

ふ、と頬の筋肉が忘れていたような動きをする。

「あ、笑った」

少年につられて、俺は声を上げずに、笑った。

先輩

「最低っ」

頬が痛む。

じんじんと、まるで音をたてているかのように、強く。

「……」

なにか、私がしたか。恋をしただけではないか。ただ一生懸命に、一途に恋をした。それだけなのに。

「早く消えてよ！」

こんなにも心無い言葉をぶつけられなくてはならない理由がわからない。頬は痛む。思いっきりグーで殴られた。そんな彼女は右手を押さえながら泣きじゃくっている。きっとそれは痛みだけではない。

「ごめん」

彼女の後ろから、小さく顔を出した彼。聞きなれたはずのハスキーボイスがとても仰々しく聞こえた。

「……もうっ、行くよ」

彼女は半ば無理矢理に彼の腕を掴み、そこから離れて行った。

「……つくしゅ」

くしゃみが出た。笑ってしまう。

恋をした。一生懸命が伝わらなかったのに、なぜ私は泣けないのだろう。彼女は人目もはばからず、あんなに泣きじゃくっていたのに崩れない、表情に嫌気がさす。

「大丈夫？」

背後から、聞き慣れない声。同時にひやりとした冷たい感覚が赤く腫れた頬に伝わった。

「え」

「やー、派手にやられたね」

苦笑いをしながら、誰かが冷えたペットボトルを私の頬に当てたのだ。

その冷たさが、熱を持った頬に気持ち良い。

「……センパイ」

「あ、俺のことわかるの」

「わかります」

誰かは、喫茶店のバイト先の先輩だった。少し長めに伸ばした髪を掻き分けながら、先輩は呟いた。

「佐伯サン、男見る目ないよ」

につ、と先輩は笑う。その笑顔についカツとなりペットボトルを片手で振り払った。マヌケな音をたてて、ペットボトルは地面を転がる。

「……あ」

仮にも優しさで、声をかけてくれた先輩にひどいことをした。人通りの多い街中、無惨に振られ、取り残された「彼女側」にせつかく好意で手を貸してくれたのに。それがたとえ、同情だとしても。

「ごめんなさい」

慌てて頭を下げる。ついでに言い訳も述べてみる。

「私、いまちよつと平常心じゃないんで」

逃げる。

頭にはその3文字だけだ。

「ねえ」

先輩は固い表情のまま、私に手を伸ばしてきた。
ヤバいつ。

殴られる……！？

「……よしよし」

しかし、先輩の手は私の意表をついて頭にまっすぐ降りていき、まるで子どもをあやすかのような手つきで私の頭を優しく撫でた。

「……？」

わからない、と言った表情で私は先輩を見る。慎重差のせいで、少し上目づかいになった。

「失恋したんでしょ？」

先輩は優しく、そう私に言った。

その仕草がなんだかとても、本当にとても穏やかだったから、だから、涙がでたんだ。

そう、先輩が少しばかり優しくすぎるから。

「……っ」

「器用だね、佐伯サン。声ださないで、泣けるなんて」

頭においてあった、先輩の手が少しずつ下のほうへ降りてくる。大胆な行動なのに、先輩の手はどこか控えめだ。先輩が親指の腹で、私の目元を拭った。

「ね、佐伯サン」

耳元で先輩が呟く。その声がかすかすしくて、私は少し顔を背けた。

「……ない」

「え？」

「私、絶対センパイだけは好きにならない」

だって、先輩はいつだって……いつだって。

「それはそれは」

「……好きに、ならない」

「佐伯サン、男見る目ないよ」

でもね、もう時間の問題かもしれない。

一途な恋だった。

一途な想いを忘れるためだけの、一途な恋だった。

「ほんと、無い」

先輩の顔が近づいてくる。

あ、と思った瞬間私の唇と、先輩のそれが、重なった。
強く、それでいて優しさのある、そんなキスだった。

初恋

「ねえ、忘れないでね」

涙声の彼女の声。だけど懸命に笑おうとしている表情を見て、思わずこっちが泣きそうになった。

「バカ、忘れるわけないじゃん」

私はそつと、彼女の華奢な肩に手を回して、引き寄せた。一人にしたい。一人になりたくない。だけど私たちはまだ子どもで。どうしようもなく無力で。

「ね、電話するから」

手紙だつて書くし、メールだつて迷惑メールと数張れるくらい送るし、頼まれてもないモーニングコールもする。だから、忘れないで。こっちの台詞だ。

「離れたつて、友だちでいてね」

呼吸が止まる。わかつてる。ちゃんと頷け、って自分に言い聞かせているのに私の頭は素直に縦に揺れてくれない。

「鈴音？」

ほら、彼女が不安そうな瞳でこっちを見ている。ただ頷けば良いだけじゃないか。ただ自分と彼女はお友達、大親友。その関係を肯定

すれば良いだけじゃないか。なのに、強情だ。いつのまに、こんなにもワガママになったのだろう、私は。

「……っ」

彼女を強く抱擁した。お願い、嫌いにならないで。

「ありがとう」

彼女がそれをどう受け取ったのか、わからなかったが綺麗な泣き顔で彼女は笑った。

「ばいばい」

ジリリリ、と出発を告げる電車のベルを合図に彼女の背中が遠ざかる。

いま、終わりを告げたのか。

私の、絶対に叶わない初恋は。

「……愛子」

もう、届くことがないと知りながらも、私は彼女の名を幾度となく呼んだ。

駅のホームは、多くのひとで溢れていたけれど、私が求めているたった一人はもういないと思うと、泣けてきた。

「ばいばい」

さよなら、私の大好きなひと。
さよなら、私の初めてのこい。

背を向けた駅の方から、高々に出発の合図を知らせるベルが鳴った。

日常

きみの掌、ぬくもりを感じられればそれでいい。
なにも知らない、愛おしい君へ。

「浩介！」

耳元の大きな怒鳴り声で浅田浩介は目を覚ました。なんてことない、
毎日の朝の習慣であつたが母親のこの怒鳴り声に一向に慣れないこ
とが浩介は不思議で仕方なかった。

「浩介、いつまで寝てるの」

「あー……おきた」

「もう自分で布団持つてこないと干さないからね！」

ばたん、と勢い良く部屋のドアが閉まる。枕元にある携帯を開くと、
思ったとおり着信が一件。これもまた浩介のいつもの朝だ。“金森
由貴子”と表示された電話番号に即座にリダイヤル。ワンコール、
ツーコール、がちやり。

『もしもし』

聞きなれた声。そして緩む自身の頬。もしもし、と言いつ返せばあきれたように笑う彼女。もうおきた？ と毎朝の決まり文句を聞けば20分後に、と言って電話を切る。ばやばやとしていると一階のリビングからまた母親の怒声が聞こえてくる。慌ててワイシャツを羽織って制服のズボンをはく。ネクタイを結びながら階段を下りて、朝ごはんにありつく。浩介は自身が鼻歌を歌っていることすら知らずに、目の前で一緒に朝食をとる妹がにやけていることも知らずに、コップのなかの牛乳を飲み干す。

「いつてきまーす」

軽くくちを濯いで、顔を洗って家を飛び出し時間を確認。あと5分、と独り言を呟きながら目的地向かう。ぴったり5分走った先に緑の屋根の一軒屋。浩介がそこで足を止めるのと同時に、玄関のドアが開いて結うほどもない髪の毛を揺らした彼女が出てくる。

「おはよう」

声を聞けばそれは電話の主とおなじで。表札には“金森”の二文字。「おっす」

照れ隠しのように片手を上げて挨拶をする。だらしなくワイシャツがズボンから出ていることも知らずにかしこまる彼を、彼女はなんだか愛おしくて微笑む。その仕草がなんとなく気になる彼も、曖昧に笑ってごまかす。

「ね、今日もだめだったねー」

なんてことない、いつもの会話。こんな雰囲気が好きだなんてじじくさいのかなあ、など浩介が考えているうちにも隣で彼女は微笑む。単純な彼の考えていることなど90パーセントはお見通し。そんな笑顔が憎めない。

「ゆき、昨日の月9のドラマみた？」

「え、なんてやつ？」

「なんだっけ、えっとーほら熱血教師のはなしでさー」

「あー！ あっちゃん主演の」

「そーそー！」

ごたごたとまっすぐに歩けない彼女が時々浩介の肩に触れる。そのたびに胸がとくん、といやに音を立てるもんだから、変なところで鈍感なのか気がつかない彼女はへらへらと笑ったままテレビの話を続ける。あーまったく、と声に出さず浩介は頭をがしと掻く。切ったばかりで短い髪の毛のさわり心地はよくも悪くもなかった。

「ゆき」

まっすぐに歩けないもんだからしょっちゅう障害物に当たりそうになる彼女を、どこか保護者のように見ている自分がすき。何においても、彼女のほうが一枚上手なもんだからこういうときくらいはなし、と浩介はにやける。それが気に入らないらしい彼女は赤い頬を膨らませて拗ねたようにそっぱを向くんだから、これがまた愛おしい。

「浩介、手つなご」

ほら、また君は不意打ちで。浩介は自分が真つ赤になっていることも知らず、それに彼女が気づいているのも知らず、だまって彼女の左手をすくう。そのまま指を絡ませれば、彼女の細い指は折れてしまわないか心配になってふっと力を緩める。でも、今度は彼女が握り締める。うあ、と声がでる。隣でくすくす、と笑い声。

そんな日常が愛おしいのは、僕も君も、きつと同じ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7740j/>

愛逢月

2011年7月13日17時27分発行